

かささぎ

通信 第102号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2021年 4月 9日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二一年三月の「森三郎の作品を読む会」では『森三郎童話選集夜長物語』(1996、刈谷市教育委員会)所収の「おばあさん」「蛙」を読みました。

「おばあさん」は一九三二(昭和七)年五月号の『赤い鳥』に発表された幼年童話です。この作品は森三郎刈谷市民の会制作の森三郎童話紙芝居「おばあさん」(二〇一六年発行)の原話です。原話では前半で、お百姓のおかみさんが翌日市場に持つて行くリンゴを数えて手籠に入れます。ところが市場へ行く前に数え直して見ると、少し小さく、変に黄色っぽいリンゴが一つ増えていました。紙芝居では後半の、市場でこのリンゴを買ったおばあさんが家へ帰る途中に出会った不思議なお話を十六場面に仕立てました。このリンゴの中には、黄色い小鳥が悪い魔法使いによって三年間も閉じ込められていました。おばあさんによって偶然助け出された小鳥はお礼に三つの望みをかなえて上げると言って飛び立っていきま。そんな話を信じられないおばあさんが気軽に口にした望みの三つ目は、うるさい蜂を追い払うために月に行って一眠りすることでした。おばあさんは今でも月の中でぐうぐう眠っているのでしょう、と話が結ばれています。

ジョセフ・ジェイコブズ(1854-1916)の再話した *More English Fairy Tales* (1894) の中に *The Three Wishes* という話がありますが、よく考えないで三つの望みを使い切ってしまう点は、「おばあさん」と同じです。森三郎はこのような昔話にヒントを得て、この童話を書いたと想像します。他にも、魚のカマスを助けたお礼に何でも望みがかなえられるロシアの民話「カマスの命令」もあります。筆者は小学校一年生の頃、この話を紙芝居で見せてもらいました。名古屋市中小学校時代を過ごした会員の中には、出村孝雄(1908-2001)の口演童話を学校で聞いた人もいて、何十年も前の子ども時代に色々なお話を聞く機会があった幸せに話が及びました。

また、「おばあさん」は森三郎の再話作品ローズ・ファイルマンの「うもり傘」(1931.11)と筆致が似ているという感想も出ました。「うもり傘」は *The Rainbow Cat and Other Stories* (1923) 所収の話で、「森三郎の作品を読む会」では英語の原話を読む会を持ちました(「かささぎ通信」59号参照)。これまで、『赤い鳥』でファイルマンの作品を再話したのは鈴木三重吉と森三郎の二人だけとされてきました(『赤い鳥事典』p.271参照)が、宮原晃一郎も「虹猫」シリーズ三作「虹猫の話」(1927.1)、「虹猫と木精」(1927.3)、「虹猫の女大退治」(1927.9)を再話していることに最近気づきました。原話は *The Rainbow Cat and Other Stories* 所収の作品ですから、「虹猫」はまさに表題作の話だと分かります。宮原晃一郎は森三郎の兄・森銃三が『赤い鳥』に作品を発表する橋渡しをした人なので、とても縁の深い人です。このことは別の機会に詳しく発表したいと思っています。

「蛙」は一九三二(昭和七)年八月号の『赤い鳥』に発表された。小野道風十五歳の頃の話です。道風はひどい怠け者で、字が下手でした。蛙を使って兄やいとこにいたずらをしていると、逆に二人から「蛙のおまじないで字が上手になる」とからかわれます。その難しいおまじないを済ませて手習いをする、手が変わったように上手になった気がし、それを機に練習に励みます。「蛙」と「小野道風」と言えば、柳の葉に飛びつく蛙を見て、道風が発奮する話を想像しますが、ここでは柳と蛙は道風のいたずらの小道具として使われています。三郎が読者の想像を裏切って茶目っ気を出し、滑稽譚にしている感じがします。滑稽さでいえば『徒然草』八十八段に、小野道風の書いた和漢朗詠集の話があります。道風の没年に生れた藤原公任が選んだ本を道風が書にするはずはないのですが、だから珍本だと秘蔵する人の滑稽を描いた段です。同年十一月号『赤い鳥』の「榎の僧正」でも、三郎は『徒然草』四十五段の短い話を自由に面白く広げています。「おばあさん」にも共通しますが、ヒントにした原話をいかに味付けるか、三郎の感覚の面白さが見えます。

次回「森三郎の作品を読む会」の作品(二〇二一年五月十四日実施予定)
「燈台に羽が生えた話」(一九三七年十月発表)